厚生省「母子相互作用の臨床的・心理・行動科学的ならびに社会小児科学的意義」に関する研究の評価

評価委員　国　分　義　行

「母子相互作用の臨床的，心理，行動科学的ならびに社会小児科学的意義」に関する研究の第2回班会議を迎えたことによってこの研究も大体軌道が敷かれてきたことが感じられた。小児科学，心理学，社会学，行動科学等の多くの学際領域の参加によって試みられた研究は誠に特異的な研究が期待されたのであるが，それだけにその研究の方向づけが困難であると思われたが各班員の努力と協調によって着々とその成果があがってきていることは喜ばしいことである。これら学際領域に属する研究もすべて学的体系づけとして観察，分析，集計の三本の柱によって進展してきたのであるが，その学的特徴によって，たとえば小児科学の場合は観察，分析，集計のうち特に実験科学として集計の面ですぐれたものがあるのに対して，心理学では観察の面ですぐれた成果をあげてきた。これらの研究が結合することによって新らしい研究の面が展開されることが望まれていたのであるが，今回の研究の報告をみていると，石井威望班員の研究「コンピュータ画像処理による母子相互作用の研究」，高橋悦二郎班員の研究「母子同室制と母性意識」馬場一雄班員の研究「犬にみられる母子相互作用」，糸魚川直祐班員の研究「ニホンザルの母子関係－比較の視点」等は従来の心理学的研究では行きづまりのみられていた面に新らしい研究方法の可能なこと，特に集計による心理学的研究のより大きな可能性を示唆するすぐれた研究が報告された。また小児科学的研究では瀬川昌也班員の研究「子育てのcritical age－自閉症児の病態からみたretrospective study」，宮尾益英班員の研究「チック症の臨床生理学的検討」，諏訪城三班員の研究「愛情遮断性小人症の内分泌学的病態に関する研究」，鈴木淳一班員の研究「未熟児・超低体重出生児の聴性脳幹反応と聴性行動反応」等は小児科学的研究方法によって心理学的な研究方法の壁に新らしい観察と分析をひろげる貴重なデータを提供したものであり，これによって心理学研究に大きな飛躍を期待できるような報告であった。その他社会学的には三宅和夫班員の研究「最初期よりの母子相互作用，児の気質が愛着形成行動発達に及ぼす影響」，利島保班員の研究「母子相互作用に併う母親の母性・女性性獲得の過程」，畠山富而班員の研究「育児についての意識調査」，加藤翠班員の研究「母子相互作用の社会小児科学的検討，委託育児についての社会一般の評価」等により変遷する社会環境が母子相互作用に影響する面を明らかにして今後のあり方についての研究の指標を示していた。また山内逸郎班員の研究「乳汁のにおいに関する研究」は従来のような小児科医による研究では到底達することのできない研究方法が示され，工学・理学の研究の発達が十分に取り入れられ，またその分野の研究者の協力によって新らしい研究がひらかれることを如実に示していた。

紙数の都合ですべての研究報告についてのべる余裕がないが，何れもこの研究班によって学際領域の諸学科の協同により，極めて重要であるが，困難とされていた母子相互作用の研究が大きくのびることを示しており，第3年度の研究成果に一層の期待がもたれた。

評価委員　小　林　　隆

この研究班は厚生省の一大プロジェクト「心身障害の研究」の一翼を担って，小林登教授を班長とする「母子相互作用の臨床的，心理・行動科学的ならびに社会小児科学的意義に関する研究」であるが，その標題が示唆するように，班員は小児科学，産科学はもとより，広く文科系の心理学，教育学をはじめ応用工学，畜産学等からも参加しており，研究内容は多彩，ユニークである。優れた学際的なバランスは人間形成，人間発達の端緒的，原初的なライフサイクルの部分に焦点を絞っているので，未知の面白さが溢れているとともに相当の難しさも裏腹的に内在するわけである。今まで科学的な分析が不十分の，むしろ未開拓の領域であるだけに，その研究成果に対する各方面の期待は大きい。研究の方法論としては先づ，比較動物学的な発達生物学の研究から始まり，Human developmental biology へとレパートリーは拡大している。猿やその他の哺乳動物で見事に証明できるDeprivation syndrome,つまり僅かのある時点又は期間に親と仔を実験的に分離すると，その仔の心身発達に不可逆の決定的なダメージが起こるというデータは甚だ印象的であり，思わず危惧の念を人間のこどもの人間形成過程にも馳せるのである。このような精神的ダメージへの引金は極めて限られた特定の臨界時期に引かれることを知るとき，なおさらである。今日，胎児は子宮という完全密室の中でも，既に父母の音声や音楽を聞きわけ反応することが判明しており，子宮内でのDeprivation syndrome が云々されるほどである。また分娩直後という短い特殊な時期においてさえ，母と新生児の対面，スキンシップ及びアタッチメントの重要性が指摘されており，これらの一見平凡な因子やチャンスでも新生児の将来にとって何等かのインパクトとなりうることは猿の実験のアナロジーから否定はできないのである。母子相互作用におけるこれらの視覚や接触による刺激，更には，お乳の嗅い等が今まで余りにも日常的なので，その意味がわれわれには触発されなかったというのが実状であろう。今やこの研究班は新鋭のコンピューター分析や質量分析等の力を借りてこれらの平凡因子を計量化することに成功して興味ある分析を進めている。（もちろん最後まで計量は不可能な問題も抱えていることは自覚していなければならない。）これらの客観的データの積重ねによって母子の相互作用は新しい視野を提供するにちがいない。

今日，地球上には人間が開発した輝かしい社会文明が展開しているが，その反面において人間性の破壊という深刻な問題が抬頭し，それにまつわるような不幸，殺伐な諸事件が内外で報じられている。そのような観点からもこの研究班が進めている基本的な人間形成，人間発達の原理や臨界性の問題は特別の重要性をもっており，社会学的な意義も大きい。

ここに評価委員の一人として，この班の研究内容に深い敬意を表するとともに，一層の発展を期待してやまない。

評価委員　三　宅　　廉（パルモア病院）

このたび提出された厚生省の「母子相互作用に関する研究」は，誠に時宜に適したユニークなテーマであった。それはもともと小児科学なるものが未来を背負うこどもについて，あらゆる角度から研究する使命をもっていたのであるが，最近著しい技術の進歩によって聊か人間性が失われつつあり，しかも社会的意義をなおざりにする傾向の見えて来たときであったからである。従って小林教授の提唱によって，これを待構えていたかのように日本の各地で母子相互作用の研究が活況を呈し，数多くの興味ある報告が発表され，心暖まる人間味豊かな育児の原点が語られ，誠に意義深い会合になったことに対し，厚生省と小林教授に深甚の謝意を表したいと思う。

扨昨年より数回開かれた研究発表会の内容を評価することは誠に意味の深いことであるが紙面に制限があるので，その中最も行政施策の中に取上げて戴きたい問題のみに絞って私の責を果したいと思う。

幸い昨年夏ヨーロッパに於ける幼児教育視察団の一員として加わりソ連，フィンランド，ポーランド，東西ドイツ，瑞西に於ける幼児教育の原点を視察したのでその印象とこのたびの研究班の御報告とをとりまぜて我国保育の現状と将来を考えてみたい。

先ず妊娠期の母子関係では，私が日常の臨床で頭をなやますのは低出生体重児（SFD）の発生で，これが現代社会の生む産物であり日本では，「望まれない胎児」両親の不和，離婚など，日本以外では経済的貧困がその成因をなし惹いては母子関係の破綻となりその極，被虐待児を造り家庭的紛争に発展していくのである。従って先ず妊娠中の家庭環境の是正に留意したい。次には出生後の母子の接触に関する問題で，それがこの研究班の主題となり未熟児，新生児の母子同室制（13.6％）に迄発展，愛情的行動の形成がその子の全人的成長と発達の上に重要な影響を与えることが発表されたが，何れも帰する所本来の母性意識に立戻るべきことを強調している。しかし世相はこれに反し母性の職場進出の機運益々旺であり，山形地方の報告をみても都市近郊に於て著明で，委託育児か祖母への委託（８０％）その他テレビ子守が報告されている。正にこどもにとって一大ピンチであり，来るべき未来に一抹の不安を感ぜしめる。この際人格形成になくてならぬエリックソンのいう基本的信頼の重要性を考えてみる必要があるのではなかろうか。

私が訪ねたソ連レニングラードの国立小児病院長アレクセェビッチ氏は，ソ連婦人の労働過重のため未熟児産生の頻度が高くなり収容児８３９名中３３％を占めていること又母乳栄養が年ごとに減少していることを小児科医らしく心配げに語った。又モスコー周辺に立並ぶ団地アパートには必ず二階建の保育所が設けられて居り，母性の社会参加が革命以後一貫した原則として行われていることが窺われた。しかしソ連でも昨年の党大会で育児休暇を二年という思い切った対策が打出されている所からみても，ソ連でさえ母と子の問題が見直されつつあることを知るのである。

翻って我国では，このたびの研究班の報告でも従来のソ連のあとを追っている感じがしないでもない。この際他山の石としてソ連の前轍を踏まぬよう母子相互作用を真剣に受けとめておく必要があろう。我国ではもともと家庭教育の重要性が叫ばれ，児童憲章第二条でも「すべての児童は家庭で正しく愛情と知識と技術をもって育てられ…」とあるように又幼稚園令でも「幼稚園は家庭教育を補うをもって目的とする」と言われたのに，最近は家庭保育をないがしろにし施設保育所や幼稚園に期待する傾向にあるのは嘆かわしい。又母子のアタッチメントを理解しないで強制的に母子分離を急ぐ母親の多いことは事実で母子分離の技術の未熟性もこのたびの報告で窺われ，その根底をなす母性意識の稀薄化こそ時代の生んだ悲劇と言える。この際厚生省におかれては，母子相互作用研究班の報告に鑑み，未来を背負うこどもの人間性を重視され，日本固有の家族性を尊重した施策を講ぜられるように願って已まない。

評価委員として

評価委員 内　藤　壽七郎

本研究班は班長の配慮によって極めて適切な分担研究者が選定され従って工学，心理行動科学小児，社会学，産科学，小児科学と云う極めて多彩な分野からの研究者によって構成されている。目的とする「母子の相互作用」の如きものの数値的評価は困難視されていたものであるが敢えて之等の研究に取り組まれた方々の御苦労は並大低ではなかったと思う。人は「ヒト」という面と「人間」という両面をもち之の両者は発達途中も成人の後にも常に関連し合っている。母子相互作用は主として人間に関わりをもつものであり，人間形成には種々の環境因子があるが最も重要なものは胎児期より始まる母性の影響であろう。長年育児に携ったものとして感想を述べ度い。

石井等による母親の声と新生児の反応を数量的に追究する試みは画期的なものと云えよう。苦心して創造された電子器具を用いての新生児の母の声に対する反応グラフはこの方面の研究法に新らしい一歩を示したもので，今後月令を重ねるにつれどう変化してゆくかの追究を期待し度い。

スウェーデンを初めヨーロッパ及アメリカ各国では新生児の母親の乳嘴吸啜作用が求心的に母性覚醒のための重要な働きをしていることが報ぜられている。母乳栄養は乳嘴吸啜による母性愛確立に大きな意義を持つものと考えられているが，猪又等の栄養法別の小児の行動異常発生の観察に於て自閉症発生に母乳栄養児が人工栄養児より少ない傾向があるとの指摘は極めて示唆に富んだものと云えよう。斯くの如く栄養法の異りが乳児期のみの問題でなく幼児期，学童期，思春期，前成年期にまでその影響を持つ可能性を知る可きである。

このことが畠山，糸魚川等の猿を用いた実験でも窺い知ることができよう。

猿は成猿に4年半から5年を要すると云われている。人間の場合乳幼児期に加えられた環境影響の成人後の行動其他に関する異常状態の関連性を知るには20年間と云う長期を要するのに加えて，多くの環境因子が相錯綜してくるので因果関係を見るのがなかなか困難であるが猿はその点，成猿期間も短いし，人間に見るような新皮質の働きによって制禦されて乳幼児期に受けた環境とその他によって起った障害は一見消失したかの如く思われてしまい勝ちであるが，新皮質の少ない猿はその点修復されることが少ないようで観察に便であると思われる。畠山によると雌猿を早い時期から母子分離すると成猿後異常行動をするだけでなく種族保存に欠くことのできない性交及妊娠または子育てもできなかったというし，糸魚川は猿の出生後一歳までの母子分離だけでその後は普通の環境に置いたにも拘わらず成猿後長期に亘って交尾障害，補育行動障害が見られたとしている。猿の一歳は人間なら四歳か五歳に相当するのが，幼児期の重要さは人間社会でも大いに注意す可きことを示唆している。ホスピタリスムスも生後二年以内（できることなら一年以内）で正しい環境に置くことができるとその障害の進行を停止させるかまたは全く恢復させることができるが，もし一年以内に始まり三年以上続くと，も早恢復困難と推定されているが猿にも人間にも危険な時期というものがあることかもしれない。人間の場合三歳をすぎてからの情緒剝奪は長期に亘る障害を残さないとの説と比べてみると長期障害を残す限界期というものがあるらしく（筆者も常々臨床的観察から今様に思っているので）大変興味のある実験であった。森永の犬を用いた出産直後の親犬と仔犬の分離関係は人間の場合も出産後できるだけ早い時期から母子の接触が重要であるとの説をよく説明している。

山下等の育児のあり方はその母親の成育歴の中に関係しているものがあると述べている。育児のやり方が遺伝よりも母親がどんな育てられかたをされたかの環境影響が強いとの印象を与えるもので興味深い。

胎児期のみならず総て新生児など産科医と小児科医と協力があってこそ新生児期のよき環境作り，よき母子関係づくりが可能になるであろうことを日本の子供の場合特にその点考慮されることが望ましい。

馬場等を始め未熟児の場合の早期母児接触が好ましい母子関係を保てる発表は未熟ですら母児の接触関係によりよい発育と母親としての自覚に好影響をもたらすなど出産直後からの母子相互作用

が重要であることを示している。

育児は両親でやる可きであることは勿論であるが，思春期を超えるまでは主役は母親であろう。心底から母親になっていない名目上の母親が，つまり母子相互作用の不充分な母親が少くない現状を思うとき本研究班の果す役目は重いと云わねばならないし，このような研究課題を取り上げた厚生省当局の英断を評価したい。

（研究者の敬称省略させて戴きました）